

～「人生を変える本を読もう」～^{み き し げ お}三木成夫『**胎児の世界**』（望月勇輝）

「個体発生は宗族発生を繰返す」

僕が本書を読んだ感想は、あまりにも衝撃的で、感動的だったので、感想が散らばってしまっている状態ですが、手探りながら、文章にまとめられたらと思います。

人間はどのように誕生したのか、ということについての引用文です。＜人類の宗族発生は古生代の脊椎動物にまでさかのぼれるが、ここからさきは暗中模索といっている。おそらく、数億年を掘り進むうちに脊椎の構造がしだいに消失し、活動的な体制から浮遊性あるいは底着性のそれへと単純化が起こり、ついにはその奥に20億年に及ぶ酸化石の地層がつづくのであろう。そして、その終着点に、30億年余といわれる生命発生の原初の地層が位する。図 26 には、こうした人類の宗族発生の流れが、脊椎動物の系統樹の右端の梢から幹に沿って下るうねりの破線として示される。実線でないのは、あくまでも想像の世界であることを意味する。この系統樹のそれぞれの枝は、右から左に向かって、より古い家柄の宗族の発生の模様を表わす。それは、だから、哺乳類→鳥類→爬虫類→両生類→魚類の順番で並ぶ。ふつう家柄が古いというのは、代々にわたって一つの土地に根を下ろし、一子相承の職業を守りつづける家系を意味する。これに対し家柄が新しいというのは、そこから分かれて土地を移し、さらに職もあらためた、そのような家系をさす。いわゆる「分家」である。＞

(p.127～128 より一部引用)

僕はとても衝撃を受けました。人間が誕生するまでの過程として、辿っていくと、地層ではないかと言うのです。また、その地層から紆余曲折を経て魚類になり、そこからまた紆余曲折を経て、人間が誕生したという、にわかに信じがたいような誕生劇があるというのです。つまり、我々人間のもとの生物を辿れば、魚類であるというのです。

また、(p107～p117)母胎のなかで、十月十日の経過の中で、胎児はどのように成長・進化するのかということについて書かれているのですが、人間←哺乳類←鳥類←爬虫類←両生類←魚類という祖先を辿って産まれてくるというのです。受胎から約70日で人間の赤ちゃんのおもかげができるのだそうです。本書で、研究した内容は根拠をもって解説されているながらも、なんとも未だに信じられないような内容だったなと思いました。(あまりに衝撃的で何について取り上げて書いたら良いのか、混乱してしまっているので、読まれたことのない方は、ぜひお読みになってください。)

＜「人間の胎児は、母の胎内にいる十ヶ月の間に一つの夢を見ている…」胎児の夢—それは「苦しみもののみ多かりき…」と、久作はいう。それは、人類に向かう裸のサルたちの歩みつづけてきた苦難の物語の夢か。真相は、しかしたれも知らない。母胎のなかで小さな胎児が何かを思い出したように、突然、足を引っ張り、からだをくねらせ、ときに指のおしゃぶりを始めるともいう。そんなとき、かれらは、何の夢を見ているのか…。生まれてまだ目もあかない赤ん坊が、眠っているうちに突然おびえて泣き出したり、または何かを思い出したようにニッコリ笑ったりするのを、わたしたちはいつも見ている。それは、ほかでもない、母の母胎で見残したそのような夢の名残りを、実際、見ているのだと久作はいう。羊水を満たした、暗黒の空間のなかで繰りひろげられる胎児の世界—それは人類永遠の謎として神秘のヴェールのかなたにそっとしまっておく、そんな世界なのかもしれない。＞(p149～p151 より一部引用)

人間の赤ちゃんとしてお腹から出てきて、産声をあげるまでに、想像もできないような成長・進化の過程があり、我々ヒトという動物になるまでに、本当にいろいろな過程があったのだなと思いました。

また、本書を読んで、いろいろな疑問を抱きました。たとえば、引用部分にもある通り、母胎の中で、胎児は何をしていて、何の夢をみているのか、そもそも地球はどのように発生したのか、宇宙は・この世界はどういう概念で捉えるべきなのか、など定番的な疑問から今回本書を読んで抱いた疑問もありますが、この疑問についてネットで調べたり、チャットGPTに聞いたら簡略された答えを得ることができるかもしれませんが。(もし僕の疑問に対して答えがあつて、解明されていたらですが。そもそも僕の疑問の内容が間違っているかもしれないという疑問もありますが。)しかし、この疑問は自分で解決しようと、本書を読みなおしたり、同じジャンルの本を読んでいく中で、解決していく・解決されることが、良いのではないかと、むしろそれが本を読んでいくことの楽しみの醍醐味でもあるのではないかと思ったからです。

僕は今まで、疑問を抱いたことについて、また悩みについてなど、常に、簡略化されていて、かつ自分の納得のいく答えを楽しんで求めようとしていたなと感じます。これからは本を読み自分の知識を広め、自分なりの考え答えを見つけ出すことを大切にしていきたいなと思いました。

「蛇足」

本書では、本当にさまざまなことについて取り上げられていて、例えば、人間の記憶ということについて、人間はなぜ海に集まるのか、人間までの進化の過程について、などなどすべてが衝撃的すぎて、まったく触れていない部分もあり、(忘れてしまって感想文のなかで触れていない部分が多々あると思いますので)ぜひお読みいただけたらと思います。本当に衝撃的で感動的な本でした。

【編集子】人生を変える本を読もう！①三木成夫（みき・しげお）「内臓とこころ」②三木「胎児の世界～人類の生命記憶～」③三木「生命とリズム」④今井むつみ「言語の本質～ことばはどう生まれ、進化したか～」⑤相良敦子「お母さんの『敏感期』」⑥竹内久美子「パラサイト日本人論」⑦多田富雄・南伸坊「免疫学個人教授」⑧水原美苗（みずはら・みなえ）「日本語が亡びるとき」⑨江藤淳「閉ざされた言語空間」⑩江藤淳「漱石とその時代」

み き し げ お
～「人生を変える本を読もう」～三木成夫『内臓とところ』（望月勇輝）

(前回『胎児の世界』よりはまとまった文章を書きたいなと思っていますが…)

本書『内臓とところ』は、『胎児の世界』とほぼ同時期に元の原稿が執筆されたこともあり、それぞれ二冊が補足されているような形になっています。そのため、『胎児の世界』で混乱した部分を整理するような役割を果たしてくれました。

さて、『胎児の世界』の感想文の方で「個体発生は系統発生を繰り返す」つまり、受胎30日から40日あたりに、母胎の中で赤ちゃんは、魚類から両生類、爬虫類に、そして哺乳類になり、そして人間の形に変化をとげるということについて引用しましたが、今回『内臓とところ』を読んでさらに理解が深まったことは、「この地球上に生きるどんな生物も、かれらの祖先を辿ってゆけば、すべて三十数億年前という生物発生の当初にまで遡ることができるでしょう。」(p179)ということです。とても衝撃を受けました。どんな生物であれ、すべて祖先を辿れば、生物が発生した当初まで遡ることができるという、自分の中にあった常識をぶち壊すような、それは衝撃的でした。人間もサバもアリもイヌもすべて同じ祖先から生まれているという、結局人間が、この地球において特別な優れた動物なのではなくて、みな同じ動物であるということ、むしろ他の動物からすれば、人間は有害な動物であるのだなと感じました。

また、他にも『内臓とところ』で衝撃を受けた、新しく知識を得たことがあります。それは、人間のなかには、7日という単位のリズムなどさまざまなリズムが埋め込まれていて、さらには他の生物にもそのリズムが見られるということです。

「つまり生まれてたての赤ん坊はまだ夜も昼もなく、原則としてこの90分周期で眠りと目ざめを繰り返しているのではないか…それがだいたい三ヵ月頃から、しだいに大人の二十四時間リズムに移行していき、とこんな図式を考えています。ところが、これは目がさめている昼間にも見られるようです。たとえば暗算速度の変化を測ると、ちょうど同じ波が出てくるというのです。とにかく、かなり根の深いリズムのようで、とうぜん母親のお腹に居た時からあった…」(p165)

「しかしここで大切なことは、こうしたかくされた波が、私たちのからだのなかには、ほかにまだたくさんあるということです。たとえば「七日」の周期はどんな生物にも見られるという。このリズムは、あの夜型の胃袋のところで触れましたが、もちろん潮の干満のリズムで、月に対して地球が自転することによって生まれるものです。これは、さきの90分や七日のリズムと同じように、このからだの奥深くに根を下ろしているのです。ちょうど女性のからだに、この月の公転、いわゆる月経周期が内蔵されているように…こうしてみますと、月のもたらすリズムはけっして女性だけの問題ではない。すべての日常生活—休息と活動の上にはかりしれない影響を及ぼしていることがうかがわれます。したがって、眠りと目ざめのリズムは太陽だけで支配されているのではない、ということになります。」(p165～p166)

少し信じがたいようなことですが、我々人間には7日という単位など、さまざまなリズムをもって生まれ、さらに地球上すべての生物が7日単位をもっているというのです。

また、著者は言葉がどのように発生したかについて、以下のようなことを言っています。

<「人間の声は、”のどぼとけ”すなわち喉頭腔に発した音源が、咽頭腔から口腔・鼻腔で、じつに複雑微妙に修飾される。ここから、ありとあらゆる言葉が生まれるのですが、この喉頭から咽頭を経て口にいたる部分—これが問題の領域です。本日の話の初めに「鰓腸」だと申しましたが、要するに、腸管の最前端部です。」

(p141「図28 サメとヒト—のどの比較」を指して)「これでおわかりと思いますが、声の発生源である、のどぼとけの喉頭筋も、さらに、この声を言葉に直す、咽頭から口腔にかけての複雑きわまりない筋肉もわすべて鰓の筋肉の衣がえしたものであることが示されている。要するに”はらわたの筋肉”なのです。人間の言葉というものは、こうしてみますと、あの魚の鰓呼吸の筋肉で生み出されたものだ、ということがわかる。脊椎動物の五億年の歴史を遡る時、私どもは否応なしにこの事実につき当たることになるわけですが、いずれにしても、人間の言葉が、どれほど”はらわた”に近縁なものであるかが、おわかりになったと思います。なんのことはない—”はらわたの声”そのものだったのです。それは、いってみれば”はらわた抜き”では、ものを感じることはもちろん、その感じを言葉に表すこともできない—このことです。それは、いいかえれば「心で感じること」「ものを話すこと」の両者が、まさに双極の関係にあるということです。すぐれた言葉の形成は、豊かな内臓の感受性から生まれるというものです。」>(p139～144より抜粋して引用)

僕は、この文章を読んで、感動をおぼえました。人間しか持っていない、言葉というツールや、会話というツールは、魚の鰓呼吸をするときの筋肉でできていて、さらに、はらわたにつながっているという。生物が脈々と命をつないできたことを圧倒的に裏付けるようなことであり、内臓から感情が生じたり、言葉を生むという、非常に刺激になる印象的な本であったと、強く感じました。

身体を整えるということの大切さを身にしみて感じました。まだまだ書ききれていないことが多々あります。まだ読まれたことの無い方は、ぜひお読みください。◆

【編集子】人生を変える本を読もう！①三木成夫（みき・しげお）「内臓とところ」②三木成夫「胎児の世界～人類の生命記憶～」③三木成夫「生命とリズム」④今井むつみ「言語の本質～ことばはどう生まれ、進化したか～」⑤相良敦子「お母さんの『敏感期』」⑥竹内久美子「パラサイト日本人論」⑦多田富雄・南伸坊「免疫学個人教授」⑧水原美苗（みずはら・みなえ）「日本語が亡びるとき」⑨江藤淳「閉ざされた言語空間」⑩江藤淳「漱石とその時代」

〜「人生を変える本を読もう」〜 み き し げ お 三木成夫 『生命とリズム』 (望月勇輝)

三木成夫さんの『生命とリズム』を読んで、最も印象に残ったのは、「リズム」という言葉が生命そのものと深く結びついているという視点でした。これまで僕にとってリズムとは、音楽やダンスが真っ先に出てくるものでした。しかしこの本では、心臓の鼓動や呼吸、消化の働き、胎児の成長、人類の進化、そして地球や月の動きに至るまで、あらゆるものが「リズム」によって成り立っているという、とてもスケールの大きな視点から語られていました。そのリズムの大きさに驚くと同時に、自分の中にもそのリズムがあって、その流れの中で生きているのだと気づかされました。

とりわけ興味深かったのは、三木さんが「内臓のリズム」と呼んでいた、私たちの身体の中で無意識に繰り返されているリズムについての話です。私たちは生きているかぎり、心臓を動かし、呼吸をし、消化を続けています。これらのリズムは自分の意思でコントロールできるものではありませんが、私たちの命を支え続けているものです。三木さんは、こうしたリズムこそが「生命の本来の時間」であり、私たちはその流れの中に生きているのだと述べています。普段はあまり意識することのない身体の働きに、こんなにも深い意味があったのかと、大きな衝撃を受けました。

また、三木さんは現代の私たちが、この「生命のリズム」から離れつつあることを強く懸念されていたのではないかと感じました。かつて、人間は、日の出とともに目覚め、日が沈むと眠るという自然な生活リズムの中で暮らしていました。しかし今の社会では、夜になっても街が明るく、スイッチを押せば電気がつき、またスマートフォンやインターネットを使用することで昼夜の区別が曖昧になりがちです。こうした現代人の生活スタイルが、身体や心に負担をかけていると言われていて、僕自身、思い当たる節が多くあったので、とても共感しました。

例えば、夜遅くまでスマートフォンを見続けて眠れなくなったり、不規則な生活で体調を崩したりすることがいまままでに多々ありました。この不規則な生活がリズムを乱して、もしかするとその体の不調は「リズムの乱れ」から生じていると再認識されました。自分の生活リズムを見直して、もっと自然の流れに沿った生き方を模索したほうが良いのだと感じました。自分でも身体にも良くないし、心にとってもよくないと分かっているのですが、つい夜更かししてしまったりしていたので、今回を見直す機会にできたらなと思いました。

本書ではさらに、胎児の成長の過程も「リズム」の視点から語られていたのが印象的でした。以下の内容は『胎児の世界』と『内臓とこころ』の感想文でも書いたのですが、胎児は母親の体内で、まるで生命の進化の歴史をなぞるように成長していくそうです。最初は魚のような姿から始まり、少しずつ爬虫類や哺乳類を思わせる姿へと変わっていきます。このことは、生まれてくる命が単なる偶然ではなく、太古の生命のリズムの延長線上にわたしたち人間があることを示しているように思いました。自分自身も、そうした長い歴史とリズムの中で生まれ、今この瞬間を生きているのだということに気づかされました。

この「リズム」は、自分自身の内側だけでなく、人と人との間にもあるのではないかと感じました。友達と話しているとき、気が合う人とはテンポが自然に合うように感じる場合があります。また、部活動などでも、チーム全体の動きがぴったり合ったときには、言葉を交わさなくても不思議な一体感が生まれる場合があります。そうした瞬間も、なんらかのリズムや波長によってつながっているのだとすれば、生命のリズムは、人間関係などあらゆるところで大きく関わっているのかもしれないなと思いました。さらに、学校や社会の中で「効率」や「スピード」が重視される現代では、自分のリズムよりも外のリズムに合わせることを求められることが多いように思います。しかし、そうした外のリズムばかりに振り回されてしまうと、本来の自分の感覚を見失ってしまうのではないかと感じました。自分自身と周りの人と互いに良い形で進むようなリズムにする、どちらかが速くてどちらが遅いのではなくて、無理しない程にバランスをとることが大切なのではないかと感じました。

今回読み終えて、「リズム」とは単なる時間の区切りではなくて、「生きている」ということそのものなんだと感じました。心臓の鼓動、呼吸、眠くなる感覚や空腹といった、生きている証がすべてリズムに支えられていることなんだなと思いました。そしてそのリズムは、自分の中だけでなく、他者とも、自然とも、さらには宇宙ともつながっているのだということに気付かされました。そしてこれからは、自分の中にあるリズムにもっと耳を傾けながら、自然の流れに寄り添って生活していきたいと感じました。そしてたまには立ち止まり、時計やスマホの時間ではなく、自分の身体の声に耳をすませてみるのが、現代を生きるうえで大切なのではないかと、この本を通して思いました。

人生を変える本を読もう！**2000字感想文を募集しています**

① 三木成夫 (みき・しげお) 「内臓とこころ」 ② 三木成夫 「胎児の世界～人類の生命記憶～」

③ 三木成夫

「生命とリズム」 ④ 今井むつみ 「言語の本質～ことばはどう生まれ、進化したか～」 ⑤ 相良敦子

「お母さんの『敏感期』」 ⑥ 竹内久美子 「パラサイト日本人論～ウイルスがつくった日本のこころ～」 ⑦ 多田富雄・南伸坊 「免疫学個人教授」 ⑧ 水原美苗 「日本語が亡びるとき」 ⑨ 江藤淳 「閉ざされた言語空間～占領軍の検閲と戦後日本～」 ⑩ 江藤淳 「漱石とその時代 (全五部)」

人生を変える勉強をしよう！